
サクラリウム

桜井 櫻子

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクラリウム

【Nコード】

N0865S

【作者名】

桜井櫻子

【あらすじ】

粉雪のような桜の花片が散る中、失恋直後の蓮が出会ったのは、透けて見えそうな儚い容姿をした少女、悠那。

ある日を境に、二人の距離は綻ぶ桜の花のように近づくものの、悠那は自分の素性を話そうとはしない。

蓮は少しずつ、恋の痛手を癒しながら、悠那に寄り添おうとするものの、悠那は指の間を擦り抜けていく花片のように黙したまま。

だが……そんな鬼ごっこの関係は、悠那に訪れた異変によって終焉を迎える。

悠那は、一体何者なのか。

蓮は、悠那を掴まえる事ができるのか。

小さな公園を囲う桜の木々は悪戯に、二人を桜の水が詰まった水槽で惑うのを、静かに眺めていた。

*この作品は、楽園の蕾(<http://m-pe.tv/u/m/novel/?uid=hironor&id=7>)【要、18禁】のスピノフ作品となっております。

単品でもお読み戴けますが、併せてお読み戴くとよりお楽しみいただけるかと思えます。

今にも眠りに落ちそうな春の空の下、彼女は僕に最初で最後のキスをした。

「蓮先輩」

「れんくんっ」

名帝大病院。

近隣の住民にも開放された中庭の端にひっそりと置かれた四阿で、連日の夜勤でうとうとしていた僕の耳に、明るい二つの声が聞こえる。

閉じていた目を薄く開き、声の方へと動かすと、こちらに向かっていたのは、現在活動を休止している自分のバンドで歌姫を勤めていたh y n eこと藤井綾香と、彼女と僕の友人でもある藤井京也との間に産まれた小さなお姫様の藤井遥架だった。

僕は膝に乗せたまま、開いただけの教科書を閉じる。

それから、綾香と小さなお姫様に向けて手を挙げて応えた。

「どうしたの？二人が来るなんて珍しいね」

場所を職員用の食堂へ移し、綾香にはこの紅茶は好きではないだろうから、在り来りなホットミルクと、遥架には我が儘を言っただけで貰ったプリンとアイスの器を渡し尋ねる。

普段、綾香は名帝大の経済学部で勉を取っているから、時々時間が合えば一緒に昼食を取る事はあったが、彼女の愛娘の登場に尋ねられずにはいらなかったのだ。

「あ、はい。今日は遥架の予防接種で裕躍先生から連絡を戴いたので……」

綾香はちらりと娘に視線を落とし、幾分声を抑え答えた。

多分、予防接種はこれからなんだろう。

本来の目的を愛娘が知ってしまうと泣くだろうと予測した綾香は、僕に囁くように話したのだ。

まあ……子供が注射好きっていうのは聞かないね。

僕は以前研修で回った小児科で見た阿鼻叫喚な光景を思い出し、苦笑を浮かべ「頑張っただけ」と言っただけだった。

「それはそうと、京也達は元気？先日、敬夜とは電話で話したけど」

「はい。とおいちゃん元気でしたよ。ただ、敬夜さんと同居してて

大変だ、って毎日愚痴を零してます」

そう。綾香の伴侶でもある京也は、遥架が産まれて半年後、僕の親友率いるバンド「カタルシス クライ」のメンバーに遅れ、東京へと行ってしまった。

それから数ヶ月後。

「カタルシス クライ」はミニアルバムを引っ提げ、メジャーシーンへと踊り出たのだ。

その為、綾香は遥架を抱え、慣れない育児を周りのサポートもあって見事にこなし、遥架が幼稚園に入ったのを機に、この名帝大の経済学部へ入学したのだった。

この見た目は華奢で今にも折れそうな、少女の面影を残した綾香だが、その実は芯は鋼のように強く、凜とした女性だ。

僕はそんな彼女を思い慕っていた。

彼女も僕を慕っていると知っていた。

それが、どう道を違えたか、僕の友人でもある京也と、彼女が16の時に入籍をし、そして二人の間に遥架という一粒種を授かったのだ。

あの頃は、京也や綾香に対し、様々な葛藤があったな、と思い出す。

だが、それは今となっては懐かしい過去だ。

綾香に対しては、恋慕というより、僕の世界を新たなる方向から広げてくれる存在として大切に思っている。

そんな風に気持ちちが落ち着けるようになるのは、簡単な事ではなかったけど……。

僕はさんさんと陽光が差し込む窓の向こうに広がる薄紅に染まった桜に視線を馳せ。

……彼女が、僕の心の底に沈んでいた嫉妬という泥沼から、僕を引き上げてくれたんだ。

と、あの日僕の記憶に幼い姿のまま残り続けた少女を思い出していたのだった。

これで終わりにしましょう？これからも蓮先輩の隣で歌っていききたいから……。

京也の抱き締めた腕を解き、少しだけふらつく足取りで僕の前に行った君は、目の縁を薄く涙で濡らし、そう、僕に告げた。

弱い、と。だから僕が彼女を守らなくては、と。

僕は綾香の表面だけを見て、自分の理想を押し付けていたのかもしれない。

だけど本質的に柔軟な鋼のようなしなやかで人を赦す寛大な心の広さを持ち、その実、彼女はたった一人だけに真っ白な翼で包み抱き締める頑固な部分を、僕はずっと目を背けて見ないふりをしていた。

「……だから、綾香は京也を選んだのかなあ……」

いつしか陽が落ち、暗闇が満たす部屋の中で、僕はぽつりと声を零した。

手の中にあるウィスキーの入ったグラスの氷も溶け、夜の闇が滲んで見える。

僕は薄くなった液体を煽ると、新しく水割りを作ろうと立ち上がり、

キッチンへと向かう。

冷凍庫のドアを開き、製氷器を覗き込むが、あると思っていた氷の姿はどこにもなく、思わず小さく舌打ちをするとドアを投げるように閉める。

「仕方ないな。買いに行こう」

落胆した息を落とし、フードのついたパーカーを羽織り、財布を片手に部屋を出た。

頬にヒヤリと春の空気が撫でる。

昼間は幾分温みを持っているものの、陽が落ちた後の空気はいまだ冷気を孕み、思わず首を竦めてしまう。

空っぽになった僕の心を余計に惨めにし、深く眉の中心を刻み、辛辣に眼を閉じた。

こんなに辛い夜には、吞んで寝るに限る。

ザリと荒れたコンクリートの上で踵を返し、マンションのエレベーターへと歩ゆんだ。

エレベーターが一階に着くと、音もなく扉が滑らかに口を開く。

殆ど防犯とは無縁なエントランスを抜け、外に出た僕の頭上には、どこも欠けてない丸い月の照らす淡い光が静かに降り注ぐ。

そして地上では、桜の花が月光を浴びて白く発光していた。

いつの間にかそんな時期になったのだな、とぼんやり思い馳せる。

僕は儚い桜を左手に、慣れたコンビニの道を歩く。

名古屋は意外と桜の樹が多い。

特に、僕の住む辺りは駅名にも桜の名が使われているからか、至る所で春になると薄紅の小さな花々が綻び、仄かに香を漂わせる。

そんな主張ない桜が好きだった。

まるで、綾香のようだと常々思っていたから。

不意に浮かんだ綾香の淡い笑みを思い出した途端、は、と眼を見開き慌てて首を振る。

「未練がましいな」

今だ癒える様子のない恋の病に、僕は苦い笑いを唇に滲ませ、緩くなつた足を前へと進めていった。

コンビニで切れた氷と、新しくウィスキーと、酒の肴になりそうな惣菜を買った僕は、来た道を戻る。

深夜の春の空気をコンビニ袋のガサガサとした音が辺りを震わせ、広がって消えるのを、僕が歩く度に繰り返す。

耳障りな音は、切なさに溢れた僕の心を何故か叱咤しているような気がした、

「そうだよなあ。女々しいと思うよ、自分でも」

でも、簡単に諦められる程、僕は達観した人間ではない。

寧ろ、欲しいと思ったモノは、何としても手の内にしなくては納得できない性格だったりする。

その狙った獲物は逃さない精神のおかげで、綾香をバンドに引き入れる事ができた訳だし。

だからこそ、僕に訪れた挫折は振られて二ヶ月を経った今でも尾を引き、切り離す事ができないでいた。

「どこで道を間違えたんだろう」

ぽつりと悔恨の言葉が零れ落ちる。

以前、僕は綾香に告白された過去がある。

その時は僕に傾倒していた存在が、綾香に危害を加えようとするのを知り、彼女を守る為に告白を待ってと告げたのだ。

それなのに……。

彼女は僕に告白した翌年に、後輩であり、かつて同じバンドで活動していた友人である藤井京也と入籍してしまった。

そもそも二人を引き合わせたのは僕だ。

だが、綾香は京也が纏う評判を快く思っていなかったのか、初対面の時は嫌悪感露にしていたし、そんな綾香の頑なさを見て、京也も興味を示す様子はなかった。

だから二人の対面を見て、どうこうなる事はないと安心していただけ、二人が何か見えない糸で引き寄せられ、結婚した事に気付かなかったのだ。

知った時には時既に遅く、彼女は既に友人の妻となっていた。

『蓮先輩……。あのですね、あの……。私、結婚したんです……。とお
いちゃ……。いえ、藤井先輩と』

しどろもどろに話す綾香の言葉は、僕の体の中心を稲妻で裂く程強烈で、衝撃的なものだった。

頭を占めるのは『何故』の二文字。

呆然とする僕は、訝しい表情で僕を見ていた綾香に「おめでとう」と言葉を捧ぐ。

偽善的な僕の饒に、彼女は頬を赤く染め、笑みを零していた。

その微笑みが、僕の胸を深く剋る。

壊してしまいたい衝動に駆られるものの、伸ばしかけた手は結局彼女を抱く事もなく、宙で凍ったように固まってしまふ。

綾香は僕が見付けた、僕の世界を表現できる唯一の存在だった。

最初は歌うといった目立つ行為を嫌がり、僕から逃げ回っていた彼女は警戒心の強い猫のようで、「どうして綾香に固執するのだろうか」と自問自答した事も数回ではない。

何故……何故……僕は綾香をそうまでして求めるのか……。

幾度となく繰り返す問い。

だけど、何度も自分に問い掛けるうちに、ふとした時、簡単に答えが出てしまった。

僕は綾香を、体で心で、求め欲していた事に。

不安定に紡ぐ歌も、歌詞に込められたイデオロギーが、僕が求める世界に重なっていた事も。

そして、彼女の存在は、僕に新たな感情を湧きだしていた事に。

だけど、僕は綾香に手を出す事を躊躇ってしまった。

脆い硝子細工のような綾香を、自分自身の手で壊してしまう恐怖に
慄いてしまったんだ。

結局 そんな臆病に綾香を守っていたのが裏目に出てしまい、正
に鳶が油揚げを攫う状態を作ってしまったのだ。

「……………何か、踏んだり蹴ったりだな……………」

後悔の言葉を再び零しながら、散りだした桜の花片が作り出す薄い
ピンクの絨毯の上を歩いていると。

パシャ…………ン。

桜の散る音さえも聞こえそうな静寂を打ち破るような水音が、僕の
耳に届いた。

水音？

不意に届いた音に導かれるように、僕の足は自宅マンションとは反対へと向かう。

確かこの先には小さいながらも公園があった筈。

余り縁がないから利用することもないが、以前、綾香が僕の家を訪ねて来た時、そこで二人、ベンチに腰掛け花見をした事を思い出す。

薄くけぶる春の空を覆うように咲き乱れる満開の桜の下、ひたむきに僕を見詰め微笑む綾香。

親愛溢れる彼女が愛おしく瞳に映る。

穏やかで幸せな時間。

だが……もう二度とは来る事はない時間。

無意識にまたもや綾香の事を思い馳せ、僕は緩く頭を振って追い出す。

そんな僕の動きに合わせ、手にしていたビニール袋がカサカサと揺る揺るするように笑う。

「解ってるよ。忘れなきゃいけない事ぐらい」

誰に向ける訳でもない言い訳を零し、また、微かに聞こえた水の跳ねる音を頼りに、僕は公園の中へと足を踏み入れた。

広さとしてはさほど広さはないものの、公園を取り囲むように植樹された桜の木々は見事で、月明かりに照らされ幻想的な世界を生み出していた。

僕は呆けた顔で辺りを見回していると、公園の一角にある水場辺りに小さな人影が眼に飛び込んだ。

……もしかして、あれが音の元？

水場がある辺りは桜の陰となって、月の光も届かないからか、辛うじて人と確認できる影が動いているのを認めた。

まさか、質の悪い奴が何かしてるのかな。

この辺りに住むようになって大分経つが、そういつた噂を聞いたことのなかった僕は、随分物騒になったな、と考えながらも、無意識に動く足は影の方へと向かう。

少しずつ距離が縮まる毎に、人影は少女らしきものと認識できた。

影は何かを手にしたままクルクルと回る。

その度に空を舞う水の球は、月の淡い光を受け水晶のような輝きを放っていた。

それにしても。

女の子がこんな真夜中に一人で何しているのだろっつ。

治安は悪くないとはいえども、親は何とも言わないのだろっつか。

明かに小さな影は中学生位に見え、僕はそんな考えが浮かぶ。

正直、他人だから放っておけば良いのに、妙な正義感が芽生えながらも、いきなり声をかけて不審がられたら、と交互に相反する思考に捕われていると。

「誰？」

透明な声が僕へと向けられた。

「……」

「誰か、そこに居る……よね？」

すぐに言葉が出ず無言でいた僕に、透明な声はパシャと水音を立て

た後、再び僕へ問い掛けた。

何も答えない僕は佇んだまま呆然立ち尽くす。

少女は暫くこちらを見ていたようだが、業を煮やしたのか、微かに溜息を落とした後、砂を蹴りながらこちらへと歩きだした。

僕は固まったように動けないまま、次第に月明かりで姿を現す少女を瞳に映す。

その少女は、桜の花々に溶けてしまっ程白い肌に、星すら瞬かない夜を移したような漆黒の髪を濡らした、今にも消えてしまいそうな儚さを持った容姿をしていた。

「ねえ……貴方は誰……？」

翌日。

二日酔いで重くなった頭を抱えながら、バイト先に向かう為、地下鉄に揺られていた。

一体、夕べ見たのは何だったのか……。

鈍痛の中思い出すのは、失恋（と呼ぶのが相応しいのか）でどうにもならない焦燥を忘れる為、休み一日をアルコールに浸り、それが底を尽いてしまったので買い出しに出た僕の眼に飛び込んだ少女の姿だった。

人……と呼称するには余りにも人間離れした容姿を持つ少女に、僕は何を問い掛けられても呆然とするばかりで、そんな僕に少女は、

「お兄さん、抜け殻みたいよ」

無表情で言葉を放ち、僕の脇を摺り抜け駆けて行ってしまった。

弾かれたように振り返ったが、少女の姿は煙のように消え、桜の花片が静かに躍っていたのだった。

「あ、飴屋さん、おはようございます！」

バイト先の更衣室に入った途端、威勢の良い声が飛び込む。

正直、二日酔いの頭には凶器に近い声だ。

「……おはよう」

搾り出すように声を返し、自分のロッカーへと重い足取りで向かう。

今日、休むべきだったかもしれないな。

煽ったアルコールが抜けない体は鉛のように重く、頭痛は時間を追う毎に軽減するどころか一層酷くなっている。

こんな日は惰眠を貪るべきとは思うが、そうもいかない。

大学が休講の時はなるべくバイトに入っていないと生活するのが厳しくなる。

それに、こんな事位で墮落したのを親が知ったら、両手を挙げて嘲るに違いない。

『やはりお前には自立なんて無理なんだ』と。

僕の頭の中で、居ない筈の父親の音が渦巻く。

いつもなら簡単に追い払える声が、弱った僕に何重にも重なって被さってくる。

そんな事はない。現に僕はこうして自力で大学に通い、バイトをして生活をし、音楽を続けている！

否定を叫ぶと、父親の嘲笑は靄のように消え、また鈍い痛みが蘇った。

僕は頭を微かに振り、ふらつきながらも、支給された制服に袖を通す。

それからスチール製のロッカーのドアを閉じると、覚束ない歩みで店内へ出た途端、大音量の音の渦に顔を顰める。

「お疲れ様です、飴屋さん。大丈夫ですか、顔色凄く悪いですよ？」

「うん、大丈夫。それよりも在庫確認で誰かやってくれた？」

レジに入ると、心配そうに顔を歪めた後輩の女の子が尋ねるのを遮り、既に済んでるであろう業務について問う。

「いえ……。あの、今日担当の子が風邪とかで急に休んでしまったので……」

「解った。じゃあ僕がやっておくから、後頼むね」

「……はい」

申し訳なさそうに落とす声を背に、僕はレジに置いてあつた端末をインストールしたモバイルパソコンを片手に在庫を保管している倉庫に向かう。

僕が働くCDショップはビルの3階と4階にあり、フロアの殆どを売り場としている為、在庫の管理は端末で確認するのだが、この体調ではレジに立って営業スマイルする事も、対応も満足にできないから、緊急措置として地下にある倉庫に避難する事にしたのだ。

今日は平日で客も多くないし、大手アーティストの音源の発売もないから、今いるスタッフだけで対応できるだろうと踏んでいたのに、多少二日酔いが抜けるまで休もうと決めたのだった。

地下の在庫倉庫に入ると、事務机にモバイルパソコンを置き、キャスター付きの椅子へと崩れるように座る。

少し肌寒いものの、空調のモーター音以外は無音に近い倉庫は、頭が痛む今の僕には心地好い場所だった。

僕は事務机に突っ伏し深く瞼を閉じる。

脈打つ度に頭痛も鼓動打つが、刺激ない環境は、次第に頭の痛みを和らげてくれた。

体調を崩すといつも思う。

一人で生きる自由と引き換えに、独りでいる事の不自由さを。

一人暮らしは高校入学と同時に家を飛び出したから、足掛け6年になる。

自炊等、一人で生活する術は時間を追う度に克服し、何ら不便さを感じない。

だが……。暗いマンションの廊下を歩き、冷たさが触らなくても分かる鉄のドアを開いた瞬間、胸に押し寄せる寂寥感に、こんな生き方を選んだ事を迷う時もある。

迷う事はあるけど、後悔した事はない。

僕は音楽の世界に溺れていたかった。

それを生きていく糧とし、寝ても醒めても音楽に浸っていたかった。家を出て以来、理想を曲げずに色んな奴らとバンドを組んでは解散を繰り返していった。

中にはメジャーの話があったバンドもあったが、何処か満たされない感情を抱えたままデビューする気持ちになれず、その内話は空中分解してしまう。

僕の曖昧さに、メンバーは一人、また一人と離れたけど後悔はなかった。

バンドというものは一個の纏まりではない。

個々と個々が切磋琢磨しながら、一つの頂点を究めようとする戦場に近い物がある。

お互いが仲間で好敵手。

隙あらば、誰よりもステージで目立つか、人気を攫うか。

常に緊張の中で生きてきた。

そんな同じ方向を見詰めたまま競うのは、僕自身も向上できるし、楽しかった。

だけどベクトルが違う方向へと進みだした瞬間、それはバンドの音ではなく、複数の自己主張の場となるのだ。

僕は自分の作り出す世界を壊されたようで、幾つもバンドを組んでは、自ら解散に導いてきた。

それでもバンドを組む行為はやめられず、親友の敬夜に苦笑されながらも、理想を追い求め続けたんだ。

そんなある日。僕は久しぶりに赴いた母校で綾香と出会う。

授業中のしんとした校内から微かに聞こえた歌声を頼りに、僕は夢遊病者のような歩調で声も元へと向かっていく。

少しずつ明確になる歌声に導かれ、中等部の中庭で揺蕩うように歌を紡いでいたのは、制服のプリーツスカートの褶を崩す事なく、木漏れ日の下で腰掛けていた華奢な少女だった。

刹那、言葉にしがたい衝動が全身を駆ける。

そして。

ああ……。僕が本当に探し、欲していたのは彼女だったんだ……。

次には根拠ない確信が体を支配していた。

「運命」と呼ぶには陳腐だけど、それが一番近い言葉。

綾香と出会った時から、僕は彼女にしつこく食い下がり、元々押しに弱い彼女は諦めたように僕のバンドに入ってくれることを承諾し

たのだった。

たった二人だけの『A l s a y + D e a t h』。

これ以上は必要はなかった僕の楽園。

だけど……僕は道を間違え、二人の楽園には僕一人だけが、時を止めたまま佇む。

そして、再び僕は孤独の中で生きることになったのだ……。自ら起こした罪によって。

「自業自得だけど……辛いなあ……」

体調が酷くなったのか、頭痛はないが倦怠感が体の力を奪い、僕は伏せたまま吸い込まれるように眠りに落ちていった。

「38度。蓮君さ、風邪の時位は仕事休まないと……」

「そうしたいのは、やまやまなだけどね……」

「言い訳は熱下げてからだよ」

ピピピと電子音が脇から聞こえて直ぐさま、親友と同じ顔をした若い医師が、着ていたTシャツの首口から手をつ込み奪った体温計に視線を落とすと、呆れたような言葉を僕に向けた。

気怠い感じが時間を追う毎に増し、仕事帰り、自宅の傍にある名帝大病院で勤務する親友の兄、宮城裕躍に頼み診察をして貰ったのだが、親友の宮城敬夜のようなダイレクトな毒ではないものの、あからさまな厭味は、ダメージを受けた体には少し辛い。

「ついでに血液検査もしようか。蓮君、全然まともな食事してないでしょ。眼球真っ青。典型的な貧血の症状だよ」

「……や、元々貧血気味で……」

「つべこべ言わない。言う通りにしないと強制入院させるよ?」

流石、親友と双子だ。

有無を言わさない静かな迫力で僕に迫ってくる。

……て、コレ、有らぬ誤解を生むんじゃ……。

「……………お、お願いします……………」

今にも唇が触れそうな位置まで寄る親友の兄に、たじろぎ後退る僕は、諦めの声を出すしかなかった。

血液検査のついでだからと、点滴まで受けてしまった僕は思わぬ出費に、財布が痛む。

おまけに夜間診療代も加算されたし……………。

あーあ、裕躍君には「食事を三食取るように」って約束させられたが、食事以外削るのは無理だし……………。

落胆を零し、夜間診察口を出ると、昨日も行ったコンビニでゼリー飲料とスポーツドリンクを購入し、自宅への道を急ぐ。

点滴を受けてた所為で、大幅に時間のロスを喰らってしまった。

そろそろライブが近いから、その音源調整（ギター以外は打ち込みの為。ちなみに打ち込みとはカラオケみたいな物だと思って欲しい）と、綾香に頼む用件分も纏めなくてはならないのに、そのどれも手付かずで放置されたままなのだ。

どれもこれも、自分の管理不足から時間を押してしまったので、一

概に裕躍君を責めれないけど。

できれば薬だけで留めて欲しかったな、と心の中で悪態を零す。

そんな僕をからかうように、桜の白い花片が頬を微かに撫でて落ちた。

「あーあ、ホント最悪……」

「お兄さん、今日は独り言多いね」

ぼつりと零した声に被さるようにして、聞き覚えのある透明な声が背後から聞こえた。

慌てて体ごと後ろに向くと、そこにいたのは昨夜公園で出会った少女がニツコリと微笑み立っていた。

「今晚は。今日も会ったね」

淡く微笑む少女は、小さく頭を傾げている。

その不安定な姿が何処か綾香の面影と重なり、弱っていた僕の胸がキシリと痛んだ。

「ん？また黙秘？」

「あ……いや、そういう訳じゃ……」

トコトコと春だというのに、パステルピンクの低いミュールと、白い、まるで寝巻のようなワンピースを纏った少女は、片眉を上げて掬うような眼差しで僕を見つめる。

僕といえば、幻と思っていた少女のクルクル変わる表情を前に、ただ呆然とするのだった。

僕は近くの自販機で買った缶のミルクティーを、出会ったばかりの少女……向坂悠那に渡し、自分も彼女の隣へ腰を下ろした。

ここは昨夜、彼女と出くわした近所の公園の一角にあるベンチ。

お互い端に座っているからか、桜の花片混じりの風が隔てるようにして優しく過ぎる。

空には昨日よりも少しだけ欠けた月が、紺碧の中で孤独に浮かんでいた。

隣では悠那が、無言でミルクティーの缶のプルトップを細い指で立ち上げ、口許に持っていくのが窺える。

どこもかしこも華奢な少女の軀軀。

着ているワンピースの袖口から覗く手首さえも、ほんのした拍子で簡単に折れてしまいそうに見える。

その不安定さん感じさせる悠那の姿に被るようにして、先日、僕の恋心に死刑宣告をした綾香の姿が浮かんだ。

これで終わりにしましょう？これから蓮先輩の隣で歌っていききたいから……。

きっと、あの言葉を言うには勇気がいったらう。

だけど綾香は真っ直ぐに僕を見据え、毅然と宣告した。

出会った頃は誰とも眼を合わさず、自分の周りに壁を作っていた彼女が……。

とても真摯に僕を拒絶してくれた。

本当はさ、心の何処かでは解ってたんだ。

僕が綾香からの告白を遮ったあの日を境に、僕等の道は違う方へと進みだしたのだと。

解っていた。解ったけども。

認めたくなかった。

諦めたくなかった。

とても愛していたから。

京也以上に綾香を理解していたし、愛してもいた。

それに、過ごした時間も。

京也に負けたくなかった。

でも、綾香が選んだ以上は見守ろうと、二人を遠い場所から見たい

た。

それで良いと、自制に鍵をかけ、必死で感情を押さえ付けてきた。

……だけど。時が経つと共に、鬱積した感情はあの日爆発し、綾香を酷く傷付けてしまった。

それなのに、綾香はあんな事をした僕の隣で歌っていきたいと告げた。

こんな不甲斐ない僕の隣で……。

ぱた……。

缶珈琲を包む僕の手に雫が落ちる。

空は雨雲一つない満天の夜空なのに、幾つも雫は僕の手を濡らしていく。

……ぱた……ぱた……。

「……本当に好きだった……愛してたんだ……」

僕は隣に悠那が居るのも忘れ、とつとつと届く事はない愛の言葉を唇から紡ぐ。

「ずっと……君を愛してたんだ……綾香」

嗚咽混じりの声が、雫と共に零れていき、誰にも届かないまま春の夜空に溶ける。

「お兄さん……泣かないで」

不意に悠那のか細い声が聞こえたかと思うと、次に訪れたのは視界を覆う白い影。

布越しでも解る骨の感触に、自分が悠那に抱き締められてるのを知り、僕の眼からはとめどなく涙が溢れていた。

涙は色んな感情を洗い、浄化してくれる。

年甲斐もなく、幼い悠那の腕に包まれ、ひとしきり泣いた僕は、恥ずかしさで俯きながら、そっと悠那を離す。

「ゴメン……。でも、ありがとう」

悠那は自分がした行動を戸惑ったような、困ったような笑みを滲ませ、

「うっん、格好良いお兄さんでも、泣くなんて事があるの見れて得した気分だからっ」

後ろ手に指を組み、白いワンピースの裾を翻して背中を見せた。

お互い気恥ずかしさを抱えたまま、同じ方向に視線を馳せ、満開には程遠い桜を眺める。

昼間は眠くなるような空気も、流石に陽光も月光に変わると、頬に触れるそよ風も冷気を含んでいる。

おまけに体調を崩した状態で長い時間外にいたからか、悠那の姿が陽炎のようにユラユラと揺らめく。

「お兄さん？」

ふ、と振り返った悠那の驚いた顔が、水の中で揺蕩い歪んで見えた。

「やっぱり、強制的に入院させるべきだったね」

深い海の底から浮かび上がるような感覚を感じ眼を開いた途端、さつき別れたばかりの裕躍君が辛辣な言葉を投げてくる。

先程まで見ていた紺碧の空は、今では白く無機質な天井に、鼻腔を攪る桜の薫りは、消毒薬へと、そして恋の迷宮から抜け出せなかった僕をカタルシスに導いてくれた悠那は、友人の医師へと変わっていた。

「……………あれ？ここ……………病院？」

「『あれ？ここ病院？』じゃないよ。何で近所なのに、いつまでも外をフラフラしてたのかな？」

まだ呆けている僕に、裕躍君は憤然として説教してくる。顔は笑っている癖に、眼は全く笑わないどころか、怒りに色を変えてて正直怖い。

親友の敬夜が、余り感情を露にしない所為か、親友と同じ顔を持つ友人医師の姿は、なかなか珍しいような物を見た気分となった。

と、そういえば。

「あのさ、裕躍君。誰が僕をここに連れて来てくれたの？」

ふと湧いた疑問に、

「それも憶えてないの？君が近所の公園で倒れたという通報が、救急に連絡があつて、ここまで救急車で搬送されたんだよ」

憤然としていた態度が一変、半ば呆れ果てたように眉尻を下げ、友人医師が説明をする。

救急車で搬送……。

多分、通報したのは悠那だろう。

「あ、裕躍君。その搬送の時に付き添いとか居なかった？」

「……いや、別に誰も付き添ってなかったけど」

一瞬の間の後に、そっけなく返す若い医師の言葉に疑問が湧くものの、今だ下がる様子のない熱の所為で、思考は混沌と落ちていった……。

夢を見た。

様々な記憶が、僕の前で泡沫のように現れては消え、現れては消えを繰り返す。

最初に現れたのは、何の不自由もなかった幼少時代。

両親の保護の下、天真爛漫に笑っていた子供の自分。

狭い箱庭の中で、与えられた世界が全てだと信じて疑わなかった自分。

そんな狭小の世界にいた僕は音楽と出会い、今までいた場所は自分が求めていた世界ではないと自覚する。

次第に葛藤は親との衝動となり、殆ど家出に近い形で家を飛び出した。

諦めた両親は、一人暮らしの条件として、両親が希望している学校を卒業さえすれば自由にしても良いと提言してきた。

ただし、学費以外の生活費は全て自分で賄えとの条件つきで。

きつと両親は僕がすぐに根を上げると見込んで、条件を示したのだろう。

だが、両親の思惑に反し、僕はバイトを重ねつつも学業も疎かにする事なく、無事高等部を卒業して、今はこうして大学まで進学したのだ。

最初は金持ちだらけの学校に辟易してたけど、今にして思えば、あそこに通っていたおかげで友人達に恵まれ、そして……。

僕が愛と音楽を捧げた一人の女性と出会う事が出来たのだ。

綾香……僕の最愛の女性……。

今はもう、君を僕の愛する人として傍に居る事はできないけど、いつか……この傷付いた恋の傷が癒えた時には、君を一番に理解できる存在でありたい。

今すぐは無理だけど……いつか……いつか。

僕に向ける親愛の笑いを向ける綾香の姿は、誓いを胸に込めている内に泡と消え、次に現れたのは、つかの間の時間を過ごした儚い容姿を持つ悠那の透明な笑みだった。

病院で半ば強制的に入院を余儀なくされ、裕躍君に解放されたのは、運ばれた翌日の昼だった。

一応、綾香に説明して、向こうで出来る範囲を頼み、余り悩むことなく取れた久しぶりの休息のおかげで、体調はすこぶる良かった。

きつと、こんなに体が軽いと思えるのは、熱が下がったのと、悠那が積年の恋を浄化してくれたからだと信じてる。

「それにしても。悠那は一体何者なんだろう」

桜が音もなく舞い散る中、水と戯れていた今にも消えそうな儚さを纏う少女。

どうして、さほど親しくもない彼女は僕に接し、そして、あの時抱き締めてくれたのか……。

何も彼女について知らない僕は、疑問をぽつりと落とした。

「蓮」

不意に背後から名前を呼ばれ、首を声のほうへと巡らす。10メートル程離れた場所から、手を振っていたのは、時々対バンで顔を合

わせる音楽仲間の知人だった。

「久しぶり」

「おー、蓮も相変わらずだな」

拳を突き付け挨拶を交わし、二人並んで同じ場所に歩きだす。

日没を過ぎ、天は深い藍に彩られ、地上はネオンの洪水で溢れている。

退院したその足で、僕は知人のライブを観る為、栄のライブハウスへ向かう所だった。

きつと帰宅が夜半となると予測できたから、いつもはライブを観る時等は電車で行く所を、今日は機材車兼自家用車を駐車場に停め、目的地に歩きだした所で彼に呼び止められたのだ。

「最近、どうよ」

「まあ……ばちばちな。うちの歌姫、学生だし」

「そっちは？」と切り返すと「うちも相変わらず」と苦笑に顔を歪め笑う知人。

遠目に目指すライブハウスが見える。どうやら丁度、入場し始めた

のか、小さな列が出来てるのを認めた。

こんな雑然とした時に入るのも、ライブハウス側の手間をかけてしまっただろっし、客の騒然とした声を聞くのも嫌なので、僕等はライブハウス傍の自動販売機で好みの飲料缶を書い、立ち話をする事にした。

「そっいゃ、カタルシス クライがメジャーに行く話聞いた？」

唐突にされた質問に、

「そんな話があつたみたいだけど、敬夜は断つたって」

僕は問いを返しながら、掌を温めていた缶珈琲のプルトップを爪で引っ掛け開けると、鋭く開かれた飲み口を唇に充てる。

確かに実際、そっいった話は出ていた。

だが時期尚早と感じた親友であり、カタルシス クライのリーダー敬夜は、いともあっさり断つたのだ。

先見の明を先天的に持っている親友が、時々羨ましくもある。

普通だつたら簡単に飛び付きそっな旨味ある話を、切り捨てたのだから。

「あ、そついや蓮」

ぼんやりしていた僕を、知人は何か思い出したのか、不意に声をあげる。

「何？」

「基本的にここって、ライブに使うじゃん。で、基本的にスケジュールが空くこともないし」

「まあね、名目はライブハウスなんだし」

彼が何を言いたいのか解らぬまま、言葉を促す。

「それが、今月末に一日だけばかりスケジュールが空いてるんだってさ。それが、使用目的が不明の。疑問に思ったツレがスタッフに尋いたんだけど、誰が使うか知ってるのは店長だけで、他は誰も知らないんだと」

「へえ……」

「それで、ツレが店長に尋いたんだと。そしたら『絶対に言えない』って返されたらしいんだ。あの、関係者には口の軽い店長がだぞ？変だと思わないか？」

別に誰が何の目的で利用するのは自由だと思うけど……。

そう思うものの、どこからも情報が流れないのは何故なんだろう。普通なら秘密というのは必ず綻びがあつて、絶対に隠し仰せない筈なんだけど。

僕は「何か知ってるか」と好奇心露にする知人に、苦い笑いで首を傾げ、冷めて冷たくなった珈琲を喉に流した。

数時間後。この交わされた疑問が、親友の口から淡々と明かされる事になるうとは思わずに……。

ライブが終わった頃、親友の敬夜から突然電話があり、ライブハウスと彼の勤務先の間辺りにある珈琲専門店というには、余り美味しくない珈琲を出すカフェに呼び出された僕は、席に腰を下ろした途端、敬夜から驚かされる言葉を浴びせられたのだ。

「結婚式？」

「そう。今月末に、蓮がさっきまでいたライブハウスで」

いきなり告げられた親友からの言葉に、思わず素っ頓狂な声をしてしまった。

先程、ライブハウスで知人に尋ねられた疑問を、いともたやすく解いたのは、今、眼前で珈琲を淡々と啜る敬夜だったからだ。

「結婚式って……誰と誰が？」

普段僕等が利用するライブハウスは、基本的にビジュアル系バンド達のブッキングで埋め尽くされてはいるものの、時折、色んな催しでレンタルされている事は知っていた。

とは言え、その大半が昼に開催され、夜には煌びやかな格好をした男女が集まる独特の空間だったりする。

そんな異空間で結婚式を挙げようだなんて、どれだけ酔狂なんだ、
と思っていると、敬夜は人の悪い笑みを浮かべ、

「うちの京也と、蓮のとこの綾香ちゃんだよ」

煮詰め過ぎて苦味の強い珈琲を啜った。

「……………は？」

酔狂の相手が、京也と綾香の二人だという事に、眼も口も大きく開いた僕は固まってしまう。敬夜は驚愕の表情で固まってしまった僕を、意地の悪い笑みで見っていたのだった。

「……………へえ……………、結婚式かあ……………」

現実味ない話を親友から聞かされた翌日。特別約束はしてないけど、悠那と出会った公園へと足を向けた。やはりと言っべきか、既に彼女が居て、ベンチに腰かけたまま、咲き誇る桜を見上げている。

僕は、昨夜唐突に降り懸かった出来事を悠那に話した途端、溜息混じりにそんな言葉を零した。

やはり女の子だな。ひらひらと音もなく散る桜の雨を眺めながら、

口許は蕾が開くように綻んでいる。

その幸せそうな表情は、僕の胸をも温かくしていく。

まるで、羊水に守られて安眠する胎児のように、悠那と居る時の僕は、安堵に包まれていた。

「あ、そうだ」

「何？」

唐突に手を叩き立ち上がった悠那が声を張るのを、驚きで眼を丸くした僕。

「ねえ、ねえ、蓮。可能ならで良いんだけど、ブーケ貰えたら、私に頂戴？」

くるりと僕の前に立ち、手を合わせて懇願する悠那。僕は唇を弓なりに吊り「いいよ、頼んでみるね」と返答すると、

「やったあ！ありがと、蓮っ」

悠那の両腕が僕の首に巻き付き、抱き締めてくる。余りに突然過ぎたハプニングに、ただただ眼を見張り、頭の中は真っ白になるのだ

った。

「……ゆ、悠那。苦しいから」

「あつ、ゴメンね」

僕の訴えに、悠那は首に絡めた両腕を慌てて解き、手を合わせて謝罪を言うが、その浮かぶ顔は到底、反省の色が見えない。

だけど、そんな所も可愛いとか思えるのは、僕が悠那に惹かれたしにいるのだろうか。

ふと、昨日敬夜が話した言葉を思い出す。

「恋ってね、どれだけ自分が否定してても、相手に対して『愛おしい』という感情が湧いた時点で落ちてるものなんだよ」

と、過去に沢山の女性を弄んだのに、幼い少女と本気で恋に落ちた親友の言葉は、妙に納得できた。

きつと、僕は悠那に、友人以上の感情を持っている。まだ恋と呼ぶには蕾も固く、いつ花開くか解らないけど。それでも、少しずつでも良い。僕等らしいスピードで歩んでいければ。

僕は舞い散る桜の水槽の中で笑う悠那に、そっと微笑んだ。

「悠那」

「蓮」

自宅近くの駐車場に車を入れ、桜が綻びだしてから慣例というか、すっかり身に付いてしまったのか、僕の足は自然と公園と向かい、一人遊びに興じていた悠那に声をかけると、急いで駆け寄ってきた。

「どうだった？綺麗だった？」

開口一番。頬を薔薇色に上気させ問い質す悠那に、

「その前に、はい」

僕は大きめの紙袋を差し出す。

「なあに」

「開けてみて」と促す僕を、悠那は上目遣いで見遣った後、怖ず怖ずと紙袋を開く。その中にある物が何かと認めた途端、固く閉じた

唇は、花が綻ぶように淡く開き、感嘆の声が零れ落ちた。

その中であつたのは、今日、最愛の歌姫、藤井綾香が、友人である藤井京也と拳式を執り行つた時に使つた、白と緑で纏められたブーケだった。

「え、え、いいの？貰っちゃって……」

「あれ？欲しいって言つたの悠那だったよね？だから無理言つて貰つてきたんだけど。要らないなら捨てても……」

「ううん！要る！欲しい！」

首がちぎれ飛んでいくのでは、と心配になる程悠那は首を振ると、ブーケの入つた紙袋を抱き訴える。

やっぱり女の子なんだな……。

大袈裟に喜び回る悠那を見て、こちらも口元が綻ぶ。

クルクルと、着ていた薄いピンクのワンピースの裾を風で膨らませ、満開を過ぎ花片が舞う中を廻る悠那の姿は、僕の心を明るくした。

だが。余程嬉しかったのか、延々と回り続けていた悠那の動きが急に止まったかと思うと、そのまま踞り体を胎児のように丸めてしまふ。

「悠那!？」

僕は座っていたベンチから勢いよく立ち上がり、悠那の元へと駆ける。

膝を抱え踞った姿勢のまま、肩を大きく上下させる悠那の背中に手を充て「大丈夫?」と声をかけると、弛緩した動きで頭を動かし「う……ん」と元来白い肌を更に青白くさせ答えた。

「……ごめんね、驚かせて」

暫く苦しげにしていたが、時間が経つと、いつもより元気のない悠那が謝罪を零す。

「いや。何か持病でもあるの?」

「ううん。ちょっと興奮し過ぎたみたい」

なおも心配となった僕は悠那に疑問をぶつけるも、直ぐさま否定の言葉が齎され、

「あつ、もう帰るね!また明日会おうねっ」

これ以上の追求から逃れるように、去って行ってしまった。

僕は悠那が抱えていた問題に気付かないまま、呆然と小さくなっていく背中を見続けていた。

まさか、これが元気な悠那を見る最後になるとは知らずに。

あの夜を境に、悠那は僕の前から忽然と姿を消した……。

「蓮、待った？」

「敬夜」

間接照明で薄暗いバーのカウンターで一人、氷が浮かぶ琥珀色の液体が喉を通った途端、約束の時間からかなり遅れた親友、宮城敬夜は、全く悪びれた様子もなく僕の名前を呼ぶ。

外ではいつの間にか雪が降り出したのか、敬夜は髪に着いた白い結晶を払い、僕の横のスツールに掛けると「ワイルドターキー、ロツクとチエイサー」と躊躇いない素振りで注文すると、煙草に火を灯す。

その一連の動作は、女なら絶対惚れてしまっただろうな、と男の僕が見ても優雅に映った。

「敬夜は悩みなんてなさそうだね」

「……は？」

煙で噎せたのか、不快に柳眉を歪めた後、怪訝な声で返してくる。

「だってさ、仕事もバンドも恋愛も順調と言えば順調だろ？」

「まあ……『全く違う』とは否定しないけど、何もかも順風満帆じゃないよ」

そう言って、紫煙を深く吐き出す。

「誰しも何かしら問題や悩みを持つてるけど、敢えて顔に出さないようにして生きてるんじゃない？」

「それは、敬夜にも悩む事があると言いたい訳？」

「蓮、さ。僕が苦悩しない人間だと思ってる訳じゃないよね」

敬夜の言葉に、僕は否定を出せずにいると、困窮した僕を助けるように、敬夜が注文した酒のグラスと、一緒に添えられたグラスが音もなく置かれた。

敬夜はロックグラスを取り、口許に持っていく。そして、ゆっくりと含み、喉を上下させ飲み込む。

そんな流麗な親友が何か厭味を言い出さないよう、僕はカウンターに置かれたグラスの中で水泡を生む液体を、ぼんやりと眺めていた。暫くお互いに無言で、黙々と琥珀の液体を喉に流していく。微かに

ジャズの演奏が沈黙した空気を緩和するように軽快なリズムを刻む。ウッドベースの重音が、酔った頭の中でうねるのを感じながらも、僕の手はそれしか教えて貰っていない機械みたいに、グラスの中身を喉に入れ続けた。

酔って、酔い潰れて、少しでも空虚になった心を埋めてしまいたかった。

だが、どれだけ酒の力を借りても、たった数日、数時間だけ過ごした悠那の面影を消す事は出来なかった。

寧ろ逆に、酔い溺れれば溺れる程、記憶は鮮明となり、僕を更に苦しめる。

それでも素面でいるよりかは楽な気がした。

あの、透明な硝子で囲まれたような公園の中で、桜の花片の水で満たされた世界で、僕等は泣いたり、笑ったりした思い出を、昨日の事のように辿ることが出来たのだから。

「……………ねえ、蓮。蓮は、その女の子の事、どう思ってるの？」

不意にこちらを見て、敬夜は質問を請う。

どうやら無意識に、僕は悠那の事を話していたらしい。

敬夜はじっと僕を見つめながら、炭酸水の入ったグラスを口にする。

氷に反応した水泡が泡立っていくのを眺め、僕の唇からは声が自然と零れていた。

「僕は……悠那が……好きだよ……」

何の詰まりもなく、僕の口は、悠那に対する思いが自然と溢れる。

「……もう、綾香ちゃんの事は良いんだ？」

辛辣な敬夜の言葉。僕は手の中にあつたアルコールで喉を潤すと、本音を吐露した。

「今にして思えば、綾香に対する気持ちは憧憬に近かったかもしれない。……いや、僕の全てが憧れで占領されてた訳じゃないよ。ちゃんと綾香を愛していたし、大切にしたいと思っていた。だけど、悠那に出会って気付いたんだ。僕は綾香を『一人の人間』として愛していなかった事に……」

「どういう意味？」

「うん……。僕は綾香を愛してると思いながら、その実は、本当に愛していたのは、『A l s a y + D e a t h の H y n e』であつたんだって……」

僕が今まで告げた事のなかった秘密を、敬夜はただ静かに聞いている。

「僕は『Alsay+DeathのHyne』に惹かれていたのを、綾香に惹かれていると勘違いしてた。そんな僕の違いに綾香は本能的に見抜いたからこそ、僕の思いを拒んだと思うんだ」

そう……。本当はずっと以前から気付いていた。僕は綾香の向こうに居る『Alsay+DeathのHyne』に恋焦がれてたのだと。

だけど、真剣に恋をした事がなかった僕は知る筈もなかった。

その思慕自体が、幻であることを。

「僕の間違った思いに気付かしてくれたのは悠那なんだ。正直、僕は何一つ悠那について知っている事なんてない。だけど……それでも悠那が好きだと、自信を持って言えるよ」

まだ頭の芯が熱を持ちながらも、僕は発した言葉のどこにも嘘もなければ偽りもなかった。

何も知らないけど、僕を包んでくれた悠那の温もりに、僕は恋をしたんだ。

「良かったね、蓮」

淡い笑みで祝福する親友の声に、「ありがとう」と、こちらも微笑みで応えた。

まさか、これから絶望に転落するとは知らずに……。

あの後、「祝い酒だね」と朝まで飲み続けた僕は、二日酔いと寝不足を引きずったまま寒風荒ぶ名帝大学のキャンパスを歩く。

「飲み過ぎたも……」

まだアルコールが体内を循環しているような気分で、鈍い痛みが頭を襲う。

こんな状態ではまともに講義を受けれるものが、早く帰宅して寝るに限ると思うが、単位が不安であった為、渋々ながら広い敷地を歩いていると、遙か先にある名帝大病院に続く道筋に見えたのは、昨夜散々僕に酒を奨めた親友の兄である裕躍と、薄幸そうな年上女性姿が窺えた。

遠目からでも沈痛した空気を漂わせる二人。

特に女性の方は今にも倒れてしまいそうな程に痩せ、肌も白い雪同様、色がなかった。

そんな脆弱そうな女性を裕躍君が支え、いつしか僕の視界から二人の姿は消えていた。

最初は不倫でもしているのだろうかと思っってみたが、弟の敬夜とは違い、清廉を絵に描いたような彼が道を逸れるなんて大胆な行動はしないだろうと、浮かんだ疑問を慌てて首を振って否定する。

不倫云々は差し置いて、ただならぬ雰囲気を纏っていたな、と思案していたが、

「あ、裕躍君に頼んで、この二日酔いの薬を処方して貰おうかな」

ふと閃いた妙案に、僕は二人が消えた方に向かうことにした。

名帝大学は、広大な敷地を二分するように分かれていて、その殆どを名帝大病院と、医学部が占領し、僕が在籍する経済学部は間借りしてるような狭さだった。

とは言え、元々の募集人数も減少傾向なこともあり、そこまで卑屈さを感じる事はないけど。

それなりに施設は充実しているし、敷地の大半を病院、医学部が占めているとはいえ、学生のみならず、近隣の人々が集う場所となつてて、個人的には好きな場所だったりする。

僕は夜中に降り続いた雪に覆われた花壇に挟まれた小路を進み、二人の姿を探す。

春になれば様々な花で彩られるであろう周囲も、木々は無骨に枝を広げ、眠っているようだ。

流石、広大なだけあって容易に友人を見付ける事は叶わなかったけど、暫く逍遙していた僕の耳に、風の音とは違う音が届く。

僕は声のする方角へ進む内に、声は次第に明確となり、二人の姿を認めた。

話しているのを割り込むのはマナー違反かなと気後れし、踏み止まった僕の耳を襲ったのは、女性の発した「悠那」という名前。

「……………え……………？」

今……………、今何と言った？

「先生、やはり悠那は国内での手術は……………」

「申し訳ありません。私も色々手を尽くしたのですが、悠那ちゃんの今後を考えると、国内よりは手術症例の多い海外の方が得策かと……………」

「もし、もしも、渡航を悠那が拒んだ場合は……………」

「正直、今まで生存できたのが不思議な位ですから……………。僕からは何とも……………」

「そんな……………。娘は……………悠那はまだ１７歳なのに……………」

両手で顔を覆った悠那の母親は、裕躍君が告げた宣告に、肩を震わせ咽び泣いた。

……悠那が……死ぬ……？

「裕躍……君。悠那が死ぬって、どういう意味……？」

無意識に僕は二人の前に現れる、裕躍君に問い質す。

「蓮……君。何故、君、ここに……」

「そんな事よりも！悠那が死ぬってどういう事なんだよ！」

喘ぐ友人の白衣に掴みかかり、僕は悲鳴のような声をあげる。

僕の頭の中は、重く乗っていた二日酔いの痛みは何処かに消え、深い絶望が覆い尽くしていた。

「……裕躍、答えろ！」

苦悶する友人の姿が滲んで見える。

知らず知らず僕の双眸には涙の膜が張っていた。

慟哭が全身を浸蝕する。

絶望が血管を巡る。

うちひしがれ、どうすれば良いのか見失った僕の背後から、

「もしかして……貴方、蓮さん……？」

囁く声に問う声に振り返ると、戸惑った表情をした悠那に何処か似た女性が、僕の名前を尋ねたのだった。

耳が痛くなる位の静寂の合間に、秒針が進む微かな音がしじまの中で波紋を打つ。

あれから。感情を高ぶらせた僕を裕躍君は悠那の母親を伴い、カンファレンスルームへと連行した。

裕躍君は「少し席を外す」と告げて、部屋に後にした為、ここに居るのは僕と、部屋に来てからというもの、力失く項垂れたまま微動だにしない悠那の母親と二人きりだった。

カチカチと、しんとした部屋の時間が流れているのだと教えてくれる。

この無駄だと思える沈黙の時間は、沸騰した僕に、鎮める機会を与えてくれた。

下ろされたブラインドの隙間から見える鈍色の空からは、再び白い雪がちらつきだす。

まるで桜の花片みたいに見える情景は、初めて悠那と出会った時の記憶を甦らせた。

今にして思えば、あの日身に纏っていたのは、寝衣だったのだろう。羽のように軽そうな裾を靡かせ、水と戯れる悠那の笑顔。

年齢よりも幼い容姿を指摘すると、河豚のように頬を膨らませ、否

定する不機嫌な顔。

綾香の思いを断ち切れず、立ち止まったままの僕を揶揄するような意地悪な表情。

そして、失恋を受け入れた僕を、悠那が細い両腕で抱き締めてくれた体温も、甘い香りも、もうじき消えてしまつかもしれない恐怖が全身を駆ける。

嫌だ。これだけ遠回りして、やっと君に対する思いに気付いたのに……。告げる事なく、気持ちを変えず事なく離れてしまうのは嫌だ！

今にも頭を抱え叫びそうになる僕に、

「あの……」

と、消えそうな声が入る。

僕はのろりと伏せた顔を上げ、声の方へ首を巡らすと、悠那の母親が泣きそうな笑みで微笑んでいた。

「挨拶が遅くなってごめんなさい。私、向坂悠那の母親です。いつも悠那がお世話になったみたいで……」

彼女は椅子を引き立ち上がると、深々と低頭して言葉を向ける。慌てて僕も弾かれたように立ち上がり、彼女に対して頭を下げた。

「あの子、貴方と出会ってからというもの、貴方の事ばかり話しているんですよ」

ふ、と笑い声を零し、悠那の母親の声が僕の後頭部に降り注ぐ。

そっと顔を上げると、彼女は娘が興味持つ相手に向かって淡く微笑んでいた。

その悲しげに微笑う姿は悠那に似ていて、胸が軋む音をあげる。

「あのっ、悠那は一体……」

「お待たせ」

勢いよく疑問を悠那の母親にぶつけようとしたその時、僕の言葉を遮るようにドアが開き、ペットボトルのミネラルウォーターを二本持った裕躍君が現れた。

「蓮君は先にコレ飲んで」

裕躍君は持っていたペットボトルの一本と、掌に数種類の錠剤を載

せ言っ。

「ちなみに、二日酔いの薬と、胃薬だから」

そう言い、裕躍君は残りの二本の内一方を悠那の母親に渡すと、僕の隣に腰を下ろした。

僕は受け取った錠剤を燕下し、水で流し込む。

胃がじんわりと冷たさを広げ、唇から吐息が落ちる。

裕躍君は、僕が一心地つくのを確かめると、

「じゃあ、蓮君が知りたい事を教えてあげる。……向坂さん、宜しいでしょうか？」

僕に向けていた顔を、悠那の母親に移すと、了承を求めた。

悠那の母親は、先程と打って変わり、固い表情に強張らせながらも、微かに頷き答えた。

裕躍君が淡々とした口調で話す内容は、僕が想像していたよりも遥かに絶望的だった。

「……………嘘……………。冗談……………だよ、ね……………」

「こんな事、冗談で言える程、巫山戯た性格してないよ」

友人医師の言葉が、遠くから聞こえるようだ。

さつき裕躍君と、悠那の母親が話していた内容から、悠那の未来について理解していた筈。……………いや、簡単には受け入れ難く、理解もしたくなかった。

それでも、冷静に裕躍君は淡々と言葉を続けた。

「向坂悠那さんは、元々心臓が奇形な状態で生まれ、これまでも幾度となく手術を受けてきた。それでも、通常の子供達と同じような生活はできず、病室の白く四角い病室が世界の全てだと思っていた……………」

「今年の春までは」と言葉を続ける裕躍君は、僕に視線を移し、

「実は、春に蓮君がうちの病院に運ばれた時、僕は君に嘘を吐いていた。あの時、救急車を呼び、ここに連れてきたのは、悠那さんだったんだ」

「……え」

「この事は、悠那さんの調子が良くなったら話すつもりだったが……」

突然の告白に喘ぐ僕を見ていた友人は、不意に語尾を濁し、長い睫毛を震わせ伏せる。

その重々しい雰囲気と空気が、悠那の状態が芳しくないと教えた。

「……悠那は……死ぬ……のか……？」

カラカラに渴いた唇で友人に問う。裕躍君は僕に視線を交わさないまま「分からない」と力無く首を振った。

「確かに、このままでは成長していく悠那さんの体に心臓が耐え切れず、亡くなってしまう可能性は高いんだ。だけど、全く希望がない訳じゃない」

「……それは……」

「生体移植。悠那さんの体に健康な人の心臓を移植すれば、飛躍的に改善はされる。ただし、拒否反応や感染症のリスクはあるけども」

「だったら……」

「でも、悠那は移植を拒んでいるんです」

裕躍の告げた一縷の希望に、僕は縋る声を上げたが、すぐさま悠那の母親が硬い声音で遮る。

「以前から、悠那には何度も移植の話をしてきました。ですが『他人の生命を奪ってまで生きるのは嫌だ』と、申し出を蹴っているんです」

「……そういう事なんだ。悠那さんは18歳となった現在、本人の意思で拒まれた以上、僕等医療機関は手の施しようが……ない」

それに、と。

「正直、悠那さんが移植を受け入れたとしても、日本で手術を行うには時間が足りない。蓮君もニユース等を観てるから解ると思うけど、現在日本で移植待機者は一万二千人とされてる。……それに対し、手術を施行できるのは、どれ位か解る？」

裕躍君からご質問に、僕はただ首を緩く振って解らないと返す。

「統計で推定200人とされてる。解るよね。明かに日本での生体移植の症例が少ないっていうのが。風習と言われればそれまでなんだけど、日本では移植の提供に躊躇いがあり、なかなか待機者に行

き届かない。だから皆、海外に莫大な資金を投じて行くんだよ」

「……………」

「本音を言えば、医師として、僕は悠那さんを救いたい。とは言え、悠那さんの気持ちも理解できるんだ。他人の生命を奪ってまで長らえる事に対する葛藤というのが、ね」

小さく息を落とし、裕躍君は喉の渴きを潤すように、ペットボトルに口をつけ、中身を流し込んでいく。幾分水位を減らしたペットボトルの蓋を閉め、

「でも、僕は悠那さんに生きて貰いたい。だから蓮君、君に頼みがあるんだ」

ペットボトルを両手で包み、先程とは違い、強い眼差しを僕に向けて告げた。

「君に、悠那さんの移植を説得して欲しいんだ」

自分と足音が、清潔そうな白い壁に反響する。

僕は定まらぬ気持ちを抱えたまま、悠那が居るといふ病室へと向かっていた。

既に陽は落ち、明かり取りで据えられた大きな窓の向こうは、暗澹たる自分の気持ちを表すように漆黒に彩られていた。だが、重い責任を押し付けられたにも拘わらず、春以来、僕の前から姿を消した悠那に会える歓喜する気持ちがあつたのも否めない。

次第に重かった足取りも、いつしか歩を早め、悠那が居る病室に着く頃には息が微かに弾んでいた。

ふと視線をドアの横にあるプレート移すと、そこには『向坂悠那』の文字。僕の鼓動はボールのように、高く跳ねるのを感じる。すると、全身に熱を帯だす。だが、不意に、自分が与えられた指命を思い出してしまい、上がった体温が冷めていくのを感じた。

「悠那さんに、海外での移植を視野に入れる事を奨めて欲しい」

意思の強い眼差しで真つすぐに僕を射抜き話す友人医師の横で、悠那の母親は深々と頭を下げた。

僕は裕躍君の話を聞いた時、悠那を説得するのは難しいだろうと思つた。何故なら、僕も悠那の移植に対する気持ちと同じだったから。

いつ来るか解らない死の恐怖と戦いながら、自分が生き残る為に、他人の死を願う毎日。

他人の内蔵を受け入れる事の不安。

自分が生き続ける為に支払う、高額な金額を集めるために、東走西奔に駆け回る両親に対する、申し訳なささ。

そのどれもが、18歳の悠那には重過ぎる優しさだったから。

だけと……。

「僕は君に生きて欲しいんだ……悠那」

エゴイズムだと罵ってくれても構わない。偽善者と軽蔑してくれても良い。僕を嫌ってくれてもいい。それで、君が生きる灯を照らしてくれるなら……。

僕は深い息をひとつ吐き、意を決して病室のドアを開いた。

引き戸式のドアを滑らせながら開くと、正面に置かれたベッドの上で、悠那が眠っていた。

僕は起こさないよう、ドアを静かに閉めると、ゆっくりした足取りで、眠る悠那へと近付く。髪が傷まないよう、二つに結んだ悠那の寝姿は、春に会っていた時よりも痩せ、顔色も透明さが増していた。

以前よりも儚く、今にも消えそうな悠那は、僕が来た事にも気付かないまま、時折長い睫毛を揺らし、薄く開いた唇からは寝息が零れた。

「……悠……那」

そつと髪が掛かる額に手を伸ばし、優しく触れる。ひやりとした体温が掌に感じる。一瞬、不安が頭を過ぎるが、眠り続ける悠那の顔は苦悶してえず、僕は安堵の吐息をつき、髪を掻き上げるように撫でた。

「……う……」

僅かに眉間を寄せ、悠那は唸った声を漏らした後、ゆるゆると瞼を持ち上げる。そして、視点の定まらぬ眼を泳がせ、何度か右、左と動かす。だが、不意に僕の姿が明確になった途端、

「……蓮……？」

色味ない唇が、僕の名前を紡いだのだった。

「久しぶり」

僕は自分の不安を悟られないよう、わざと明るい声で挨拶するも、悠那は不機嫌に顔を歪ませ、

「あーあ。蓮に全部バレちゃったんだ」

横になっていた体を起き上がらせて嘔いた。

「もうっ、裕躍センセてば、守秘義務つての解ってないのかな」

「これだから研修医は」と、床頭台に置かれたミネラルウォーターのペットボトルを取り、不満を漏らす悠那が可笑しくて、思わず僕は吹き出していた。

「ちょ……っ、蓮君、何笑ってんのよっ」

「いや、相変わらずだな、と」

「それでも、笑うのは、女の子に失礼じゃない？」

「ゴメン、ゴメン……くっ」

一度入ってしまった笑いのスイッチは、悠那が憮然と反論しても止める事はできず、更に肩を震わせる僕に、悠那はキッと睨みつけて

きた。

久しぶりに見た悠那のクルクル変わる表情に、僕は嬉しさ半分、以前と比べて痩せ細った姿に、苦しさ半分で彼女を見ていた。

微かに涙が滲む。僕は悠那に知られないよう、笑いの頂点が過ぎてもお腹を抱え笑う振りをして誤魔化す。

辛いのは僕じゃない。悠那なんだ。それなのに、僕が泣いてしまつたら悠那が困つてしまう。それに、あの桜の夜のように、今度は僕が悠那を救いたいんだ。

「……ところで、何か話があるんじゃないの？」

暫く、解けた空気の中にいた僕に、悠那は固い声音で訊く。僕は、とうとう来たか、と内心揺らぎながら、「うん」と返す。悠那も、これから話す内容が想像できたのか、「うん」と、ふ、と僕から視線を外し、カーテンで覆われた窓へと移した。

二人の間に、ぴん、と張り詰めた空間が漂う。

それでも、悠那に石にしがみついても生きて欲しいと願う僕は、緊張の糸を断ち切り告げた……。

「悠那、生体移植を受けよう」と。

一緒に生きていこう。

そう願いを込めて告げた嘆願も、悠那は、嫌、と一蹴してしまう。

「ねえ、蓮？もし、蓮が私と同じ……若しくは似た病気で、生体移植しなきゃいけないって言われたら、蓮ならどうする？もし、提供者が蓮の大切な人で、蓮が移植を受けたら、その大切な人は死ぬんだよ？それでも、蓮は私に移植を受けろって言える！？」

息つく暇もなく、最後は叫ぶように問い質す悠那は、白い肌を上気させ、荒く呼吸を繰り返す。僕は、悠那の質問に答える事が出来なかった。いや、言葉で言うのは簡単だった。だけど懐疑的になった悠那に、果たして何処まで届くのか不明で、ただ口を閉ざして彼女を見詰める以外なかった。

確かに、悠那の言っている事は一理ある。誰だって大切な人の死後まで体を傷付けて欲しくはない。もし、もしも、悠那が健康体で、誰かに移植しなくてはならないと知れば、必ず反対しただろう。

だけど、どれだけ考えてもの話なのだ。移植されるのは悠那で、移植しなければ、寿命はあと少しで途切れる。

それならば、僕は悪になっても構わない。悠那が生き続けてくれるなら。

「……僕は、提供者が僕の大切な人であろうと、移植を受け入れるよ。確かに生命としては消えるかもしれないけど、思いは呼吸に、鼓動に受け継がれていくんだから」

偽善者、と吐き捨てるように嘯く悠那。

「偽善者でも構わない。誰もが生きたいと足掻いて日々を過ごしているんだ。それが本当の意味で『生きてる』って言うんじゃないかな。寧ろ、そうやって綺麗事を並べて自分のしている事を正当化して逃げてる悠那こそ、ふて腐れた偽善者だよ」

ガシャ……ンッ!!

「れ……蓮には、私の気持ちなんて解ないわよ!」

ヒュ、と僕の頬を掠り、背後で乾いた音が響く中、悠那は毅然とした怒りを瞳に宿し、僕を睨みつけていた。

「そうだよ。僕には悠那の気持ちは解らない。でも、悠那も僕や裕躍君や、君のお母さんの気持ちは解らない……違うかな、解ろうとしないよね」

「そんな事ないっ!」

「……そう？じゃあ何故、移植を拒むの？悠那が移植を拒んで死んだら、皆が悲しむって考えた事はないの？」

「それは……っ」

「ほら、やっぱり考えたよね。皆、悠那が大切だから、悠那に生きて欲しいと願ってるから、だから手術をしてほしいと切望するんだよ」

勿論僕もだよ、と付け加えると、悠那は萎んだ風船のように、先程の勢いは為りを潜め、でも……、と零す。

「確かにね、悠那が思うように、亡くなった人の尊厳を守るのは大切かもしれない。でもね、提供者は自分の魂がこの世から消えてしまっても、自分が生きていた証を残したいから、命を紡いで欲しいから、だから提供してくれるんじゃないかと僕は思うんだ」

「私が……誰かの命を紡ぐ……」

僕の言葉を反芻する悠那に、

「だから、拒む一辺倒じゃなく、提供者の気持ちも考えてくれないかな」

ね、と念を押すと、悠那は小さく「考えさせて」と意識しないと聞こえない程の声で答えた。僕は解ったとだけ言つと、悠那を残し、病室を後にしたのだった。

「蓮君どうだった？」

カンファレンスルームのドアを開いた途端、裕躍君が声を投げかけた。

「取り敢えず、悠那は考えさせて欲しいってさ」

ドアを後ろ手に閉じながら返すと、裕躍君も、悠那の母親も驚いたように眼を開く。それも一瞬のことで、悠那ほ母親は眦に涙を滲ませながら部屋を飛び出す。裕躍君も悠那の母親に続く形で立ち上がると、

「損な役回りさせて済まない。でも、有難う」

そう言つて部屋を出て行つた。

終わった。僕は裕躍君のドアの向こうに消えてく後ろ姿を見遣りながら心で呟く。多分、悠那は僕に対してあつた好意すら、今日の事で泡沫に帰しただろう。

幾ら悠那を奮起させるとはいえ、余りにも自虐的すぎないか。

僕は額に手を置き、くぐもった笑い声をあげる。だが。

「……………っ」

笑い声はいつしか嗚咽へと変わり、僕は二度目の恋の終わりに涙したのだった。

玄関のドアを開いた刹那、春の甘い香りが全身を包んだ。

眼前に広がるは、薄い色水を流したような空を舞う桜の花片が眼に映る。

「もう、そんな季節なんだ」

唇を微かに動かした呟きは、微睡んだ春の空に溶けて消えた。

基本的にバイトに行く時は地下鉄移動をする為、慣れた道をひたすら駅に向かって進む。だが、毎回眼の端に映る白亜の建物が飛び込むと、歩く足はピタリと止まってしまふ。そこは、悠那が入院している名帝大病院だったから。

あの、雪が桜の花片のように舞い散る夜。悠那を挑発し、彼女が長いこと渋っていた移植手術を承諾させた夜から、僕は悠那に会っていない。

ただ、友人の裕躍君からの話によると、悪化していた容態は寛解したとのこと。それと、移植について前向きに検討するようになったこと。あれだけ移植を拒んでいた悠那にしては、かなり進歩したな、と内心喜んでいた。

多少なりとも僕と話した事で、悠那が生きる気力を得たのなら、永

遠に会えなくとも良かった。同じ空の下で生きてると実感できれば、あの夜、僕のした行動が間違いではなかったと思える。

僕は顔を悠那が居ると思われる場所に向け「頑張れ」と唇だけを動かした後、駅に向けて歩いた。

「今、何ヶ月だっけ？」

「そろそろ6ヶ月の終わり位だと思います」

バイトの帰り、自宅とは反対の位置にある藤井綾香の住むマンションを訪ねた僕は、まだ余り目立たないお腹を愛おしそくに撫でる彼女に問う。

まさか、こんなにも早く、しかも、綾香の夫である京也がメジャーに進出するのが決まったこの時期に妊娠するとは思わなかった。

まあ……他人の家族計画に僕が口を挟める立場じゃないけど、京也も時期尚早とは考えなかったのだろうか。

まだまだ遊び盛りたい10代に結婚（それもお互い学生でありながら）し、そして子供を授かるなんて、僕には二人の思惑や指針が計りきれなかった。

それでも、とても幸福そうに微笑む綾香を見て、二人が決めた事なのだから、心から祝福しよう、と決めたのだった。

「あれ？蓮。いつ来たんだ？」

頭上から聞こえた物音に振り向くと、欠伸をしながら綾香の夫で、昔一緒にバンドを組んでたメンバーでもある藤井京也が、階段を危うげに降りてくるのが見えた。

「おはよ京也。随分ゆっくりな起床だね」

「仕方ないだろ。レコーディングが続いて帰宅すんのが明け方とかになるんだから。あ、綾香、俺にも珈琲淹れて」

僕の厭味を、京也はふて腐れたように顔を歪め悪態を吐き、僕が座っていたダイニングテーブルを挟む形で腰を下ろす。

「なあ、蓮からも敬夜に言ってくれよ。何があつたのか知らないけどさ、マジで鬼々迫る勢いで俺達を酷使してんだぞ」

はあ、と長い溜息を吐きながら、力なくテーブルに突っ伏す京也に、

「インディーブラストのアルバムだから、気合いが入ってるだけじゃない？」

「いや、アレは違うね。なんか、焦ってる感漂ってるんだって」

第三者的感想を述べたものの、すぐさま反論が返ってきた。

正直、親友といえど、敬夜が常日頃なにを考えているのか読み取れない。それに、最近では、更に輪をかけて表情を失くした親友の心の内など知るよしもなかった。

ただ、何となく想像はできるけど……。

僕は愚痴る京也を片手にあしらいながら、綾香の妊娠の為に暫く活動休止をする前に、区切りの意味を含めて行っライブについて打ち合わせをするのだった。

結局、終電ギリギリまで話し込んだ僕を、レコーディングに向かう京也に便乗させて貰い、自宅マンション付近まで送ってもらっ事に車内では、レコーディングの愚痴に始まり、メジャーに行く事に対する不安や、綾香の事、そしてこれから産まれてくる子供のこと等、溢れんばかりに話す京也に、僕は苦い笑いを繰り返した。

「あ、ここで良いよ」

「別にマンションの前まで送るけど？」

「いや、コンビニにも寄りたいから」

ここで、と、いつも行くコンビニの前にある路肩を指して停止を促

すと、京也は滑るようにハンドルを捌いて車を寄せ、ゆるやかに停車した。

「ありがとう。京也はレコーディング頑張った」

ドアを開け、降りながら告げると、了解、と手をヒラヒラ扇ぐ京也に、僕は苦笑を零し、静かに発車した車を見送る。

きつと面映ゆい気持ちで一杯なのだろう。

くすりと唇を淡く綻ばせ、僕はコンビニの店内に吸い込まれるようにして入った。

薄く冷える夜空に、手にしたビール袋の軽い音が昇っていく。中身は毎夜欠かせなくなったビールの缶が数本が、袋の音と不協和音を奏でるように、鈍いリズムを叩いていた。

ふと、民家の塀の先で夜闇に浮かび上がる桜の花に眼を向ける。

「……もう、四ヶ月経ったか……」

僕は悠那と最後に会ってから、そんなに長い時間が経過していた事を、開ききった桜の花を見詰めてそつと零す。

自分から引き離れたとはいえ、日毎に悠那に対する想いは募り、胸

が痛くて苦しい。

それでも、あの夜、自分がした行動は、悠那に生きる道を開いた事に後悔はなかった。

「だけど……、辛くて……苦しいんだ」

悠那の存在は、綾香に埋め尽くされていた僕の心の隅々まで浸蝕し、病に冒されたような感覚を憶えた。

「……逢いたい……悠那……」

せめて一目でも、悠那の姿を見たい。

何度も思っては、名帝大病院に近づくものの、あれだけ強引に悠那の神経を逆撫でしてまで挑発して、ずっと拒否していた彼女に手術する意思へと向かわせた僕に会いたくはないだろうと、勇気が出なくて踵を返した。

「本当に臆病なのは、悠那じゃなく僕なのに、ね」

自分を卑下する笑いを口許に滲ませ、家路を進んだ。

夜の空気は、緩く動く風に乗って、桜の優しい香りを運んでくる。

何だか慰められてる気分で、丁度、悠那と初めて出逢った公園に差し掛かった頃。

ぱしゃ……んつ。

水が躍る音が、自棄にはつきりと聞こえたのだった。

僕の足は無意識に公園へと駆け出していた。

大した距離じゃないのに、不健康に過ごした体は、ちょっとした事でも息を上からせる。溺れそうに喘ぎながらも、僕は走る事を止める事はなかった。

悠那かもしれない……。

淡い期待を胸に、一秒も早く公園へ、と急いだ。

公園に着くと、僕は入口から動けずにいた。急に立ち止まったからか、荒い呼気に混じって笛を吹いたような音が漏れる。心臓も、服の上からでも分かる位に、高く鼓動を打っていた。

カラカラに渴いた喉を冷えた唾液が流れるのを感じながら、意を決して公園に踏み入ろうとする。だが、見えない壁が侵入を阻むように隔てた。

そんな僕の耳に、水が跳ねる音が聞こえる。それなのに僕は公園の中に入ることができない。

多分、僕は恐れてるんだ。悠那が僕を認めた瞬間、翻して逃げてしまふ事を。

なんて臆病なんだ。なんて滑稽なんだ。

あの夜、自分で悠那を突き放した癖に、自分が同じようにされると
思うと、こんなにも恐れを抱くなんて……。

口許に嘲笑を浮かべ、自身を虐げる。

いや、悠那に向けた仕打ちに比べたら、まだまだ足りない。

僕は公園の入口で、自嘲に思考を巡らせていると。

「……………れ……………ん……………？」

呟くような声に、僕は俯いた顔を上げると、泣いてるような、笑っ
ているような複雑な表情で僕を見ていた悠那が、そこに立っていた。

「……………悠……………那……………」

久しぶりの再会。

公園に据えられたベンチに腰掛ける僕等の頭上を、音もなく薄紅の
桜の欠片が躍る。

以前に比べて、透明さが増したように感じる悠那を横目に、僕は何
も言う事ができなかった。

悠那も時折、僕をちらりと見ては、すぐさま逸らし、何か告げよう
とする唇は淡く動くものの、それは言葉にはならず、空気となって

消える。

暫く無言の状態でありながらも、視線だけは交わされる僕等を、散りだした桜の花片が笑っているように見えた。

「まるで、桜の水槽にいるみたい」

ぽつりと聞こえた悠那の声。その声に導かれ辺りを見ると、空から降り注ぐ桜の花片は、風に乗って揺蕩うように揺らめき、悠那の言葉通り、僕等は桜色の水槽の中にいる魚のようだった。

「うん。綺麗だよね……」

「うん、溺れそうなくらいに綺麗……」

……うん。このまま二人、桜の水の中で溺れてしまいたいね……。

悠那の天に馳せる姿を見つめ、僕は刹那主義的な考えに彩られる。

お互い、過去も未来も認めなければ、そうなくても良いと思う。だけど、それは無理な夢だとも知っていた。

僕は僕の人生を歩んで来たし、悠那も悠那で今日までを生きてきた。

決して交わる事のなかった僕等は、この猫の額程の小さな世界を境に、出会い、幸せと思える時間を過ごし、僕は君に恋をした。

悠那が僕に対してどんな感情を抱いてるか解らないけど、僕は生命の存続を諦めた悠那に、もっと生きて欲しいと願う。それが悠那の望みではなくとも、エゴイストと言われようとも、僕は悠那に生きていてと願った。

はらはらと降る桜の雪を眺め、悠那へ思い馳せていると。

「蓮」

悠那が僕の名前を紡ぐのを聞き、隣に頭を動かすと、真っすぐに僕を見詰める悠那の真剣な顔がそこにあった。

「な、なに。悠那……」

余りにも真剣な悠那の眼差しに、激しく胸を高鳴らせ、吃った声で返す。悠那は一瞬、僕からの言葉に眼を丸くしたが、次の瞬間には吹き出して笑い声をたてていた。

「蓮っ、何で緊張してるの？」

「べっ、別に緊張なんか……」

「ほらっ、また吃ったっ」

否定する僕の声を塞ぎ、悠那は明るい声で突っ込んでくる。あながち間違っていない指摘をされた僕は、眉尻を下げて苦笑に唇を歪めた。

暫くの間、小さな公園に、悠那の笑い声が広がる。

僕は彼女の軽やかな笑いを見守っていた。だが、不意に声はピタリと止み、またも僕に視線を向けて、

「いめんね、蓮」

先程とは違い硬い声音で謝罪を告げた。

「別に気にしてないから」

「うっん、違っの」

苦い笑いで返した僕に、悠那は首を緩く振って否定する。

「あのね、お母さんと裕躍センセから訊いたんだ。蓮がわざわざ悪者を演じて、私に手術を受けるように仕向けてくれたこと」

「違っよ」

「いいから、黙って聞いて？」

「……………」

毅然と上目遣いで嗜める年下の女の子の命令を、僕は黙ることを受け入れる。悠那も分かってくれたのか、一度深く息を吸った後、細く長く唇から流し。

「本当はずっと手術受けるの怖かったんだ。だって、必ず成功するとは限らないし、成功しても、その後の感染症とかで死ぬかもしれない。それに、自分が助かる為に、誰かの命が消えるのを、祈るのも嫌だった……………」

僕を真つすぐに見ていた悠那の視線は、次第に膝に置かれた自身の手に注がれていた。はらりと耳にかけた髪が頬に影を作る姿が、余計に物悲しさを滲ませた。

「だけど……ね。それは単なる言い訳だったんだよね。誰かの命を奪って生き延びようとする、勇気のない自分から逃げる為の」

「……………」

「でもね、前に蓮が言ったでしょ？『綺麗事を並べて自分のしている事を正当化して逃げてる悠那こそ、ふて腐れた偽善者だよ』って。あの時は、凶星指されちゃって蓮に当たっちゃったけど、確かに私、偽善ぶって苦痛から逃げてたんだ」

俯いたまま呟くように話す悠那の声は次第に震え、組んだ手に雫が落ちる。

「本当は……生きたい。もっと、もっと、蓮と笑い合っていたい……っ」

搾り出すような叫ぶ悠那を、僕は強く抱き締める。腕の中にいる悠那の体は、痩せて骨が浮き、決して抱き心地の良いものではなかった。だけど、今にも折れそうな体をした悠那が愛おしく、大切な宝物のように感じられた。

悠那は僕の服を強く掴み、何度も肩を跳ねながら、しゃくりあげる。まるで幼い子供みたいな泣き方をする彼女の後頭部に手を延ばすと、ゆっくり撫でていく。

時折、桜の仄かな香りとは違う甘い匂いが鼻腔を擽る。

悠那の細い髪が放つ香りに、僕が今、腕の中に包んでいる事が、夢ではないと教えてくれた。

だから。

「……悠那。僕は君が好きだよ」

泣きじゃくる悠那の肩に顔を埋め、そつと耳元で愛を告げる。すると、悠那は僅かにピクンと肩先を跳ね、泣き声を唐突に止めた。

静寂が僕等を包む。

もしかしたら、時期尚早と焦る僕の耳に、

「……本当……？」

澄まさなければ聞こえない程のささやかな声が、胸を微かに擽った。

「うん、本当。悠那が好きだよ。……だから、これから先も、悠那と一緒に生きていけたら幸せだよ」

「ふふっ、まるでプロポーズみたい」

僕が告げた告白に、胸に伏せた顔を上げ微笑む悠那。眦を涙で濡らし、頬を桜の蕾のように染めて笑う悠那が綺麗で、

「手術が成功したら、本当に結婚しようか」

本心から話す僕の顔も、きつと赤くなってるだろう。

ああ……、今なら京也の気持ちがよく分かる。あの時、僕は綾香を愛していたけど”綾香でなくちゃいけない”という気持ちは希薄だった。だけど、京也にとっては、他の誰よりも”綾香だけ”を求める意識が強かった。あの、全ての人間を見下した場所にいた京也が、初めて自らの足で、綾香のいる場所まで降り立ったであろう心境が、今の僕には、はっきりと感じる事ができた。

お互い顔を赤くしたまま微笑み合う。そんな僕達を祝福するのか、桜吹雪がフラワーシャワーのように二人に降り注いだ。

「うん、約束ね。帰ってきたら、蓮のお嫁さんにしてね？」

「約束。絶対帰っておいで」

「頑張つて闘う。だから、蓮も待っててね」

「うん。悠那が帰ってくるまで待ってるよ」

僕と悠那は互いの両手の指を絡ませ、額を寄せ、約束を誓う。

不安がない訳じゃない。だからこそ、僕等は誓いを交わす。まるで子供っぽい、ままごとみたいな誓いだけど、僕の心にも、悠那の心にも、深く刻まれたに違いない。

「私が帰るまで、絶対に浮気しないでねっ」

「大丈夫。こう見えても一途なんだよ」

「ふふっ、自分で言うっ？」

「本当なんだから、しょうがないんじゃない？」

「心配しなくても、ちゃんと蓮が一途なのは知ってるよ」

え？、と悠那が言った言葉に疑問がよぎった瞬間……。

「蓮、私も蓮が大好き」

悠那の顔がゆっくりと近付き、僕の唇に悠那の柔らかそうな唇が重なるのを、自分の体温とは違う温もりと、降り注ぐ桜の雨に包まれながら、信じる事ができたのだった。

最終話

悠那が移植手術の為に渡航してから、四度目の桜が、満開を迎えた。

綾香はこれから何が起こるか分からない遥架を連れて、小児科外来に行った後も、僕は一人、食堂の窓から、咲き誇る薄紅の花を枝中に綻ばせる姿を眺めていた。

「……もう、四年……経つのか……」

あれから四年もの間、悠那は一度も僕にメールや手紙を寄越す事はなかった。それは、あの告白の後、悠那の口から戻るまでは出さないと聞いていたからだ。

理由を尋ねると、「だって、蓮が恋しくなつて寂しくなるもん」と、唇を尖らせる悠那。とても悠那らしい決意の仕方だと、思わず微笑が零れた。

「……ふ。僕が医師の勉強してるって言ったら驚くかな……」

そう。僕は悠那が渡航した後、名帝大の経済学部から医学部へと新たに編入し直したのだ。

周りは突然の進路変更に問い質したが、理由を知っているのは、親

友の敬夜と、敬夜の兄であり、僕と悠那を結ぶ役割を果たしてくれた裕躍君だけだった。

二人とも「よくも思い切った行動に出たね」と、別々に話したのに、双子の神秘よろしく、一言一句違わず告げたのには笑えてしまう。

それでも、僕が選んだ道をからかう事なく、応援してくれると言ってくれたのは、嬉しかった。それに、編入に関して、二人は尽力を尽くしてくれて、多大に感謝もしている。

おかげで、一般教育課程を経済学部で修了していたのもあり、編入後すぐに基礎医学課程を受けることができた。留年もしなかったから、去年から臨床医学課程に進み、現在は各病棟を転々として学ぶ日々だった。

「あ、飴屋先生。宮城先生が小児科外来で待っているそうですよ？」

「解りました。ありがとう」

思い馳せていると、不意に名前を呼ばれ、声がした方に首を巡らせる。そこには今僕が臨床で入っている病棟の看護師が微笑んでいた。僕は彼女に薄く微笑み、謝辞を告げると、食堂を後にした。

既に混雑の波は引いた後なのか、外来が立ち並ぶフロアには、薬待ちの患者や、後片付けに追われる看護師達が時折見えただけだった。

僕は裕躍君のいる小児科外来のある場所に近付くと、さっきまで静かだったのはどこに、まるで戦場の有様だった。

……うわぁ、絶対コレは僕に予防接種の仕事を押し付けようとしてるな。

裕躍君の呼び出し目的が判明した途端、僕は今来た道へと踵を返し逃避しようとするも。

「うわーんっ、ちゅーしゃきらいーっ」

僕の脇を小さな影が駆け抜ける。一瞬、呆気に取られた僕の背後から、

「蓮先輩っ、遥架を捕まえてくださいっ」

綾香の慌てる声が耳に届いた。振り返ると、困り顔でこちらに走ってくる綾香の姿が見えた。

「うん、綾香はここで待ってて」

「すみませんっ」

息を切らす綾香にそう言って、僕は遥架が消えた方へと走り出した。

「まさか病院の外に出たとかじゃないよね」

暫く小さなお姫様を探すものの、すっかり姿を見失った僕は、病院の敷地内を遥架を探してさ迷う。かなり広大な敷地なうえ、遥架はまだ小さいから、植木の裏にでも隠れてないかと、細かく探してたおかげで、なかなか搜索が終わる気配がない。

嫌な不安がよぎりながらも右往左往していると、先程僕がいた四阿に辿り着く。すると、あれだけ散々探していた遥架は、拙い言葉を補っているつもりなのか、身振り手振りを交えて誰か女性と談笑しているようであった。

「遥架っ」

「あっ、れんくーんっ」

急いで着ていた白衣の裾を翻して、駆けながら遥架の名前を叫ぶと、当の本人は安閑な口調で僕を呼び、手がちぎれそうな程に振って答える。

「お前はあ……。ほら、ママが心配してるから帰る……」

「……蓮？」

遥架に駆け寄って抱き上げた僕に、遥架と一緒にいた女性が、迷う気配もなく僕の名前を呟く。

まさか……。

ゆっくりと遥架を抱えたまま、ぎこちなく振り返ると、随分大人っぽくなったけど、悠那の笑顔がそこにはあった。

「ただいま」

ニツコリ、花が綻ぶように微笑んで、悠那が告げる。あの夜と変わらぬ笑顔に、僕は抱いてた遥架を降ろすと、悠那に向けて両腕を広げる。悠那は一緒戸惑った表情をしたものの、満面の泣き笑いで僕の胸に飛び込む。

「…………お帰り、悠那」

そんな僕等を祝福するように、淡い空から、桜の花片が優しく降り注いだ。

四度目の春。夢ではなく、僕は、愛おしい恋人を抱き締める事ができたのだった。

e
n
d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0865s/>

サクラリウム

2011年4月17日20時07分発行